

乳幼児版子育て認知尺度の作成 - 乳幼児版ペアレント・トレーニングに向けて2 -

著者	立元 真, 上富 望子, 武井 優子
雑誌名	宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要
巻	25
ページ	33-41
発行年	2017-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10458/5960

乳幼児版子育て認知尺度の作成 - 乳幼児版ペアレント・トレーニングに向けて 2 -

立元 真¹ 上富 望子² 武井優子³

The Development of Parenting Cognitive Scale for Mothers of Toddlers 2

Shin TATSUMOTO, Misako UETOMI, Yuko TAKEI

子育て支援のためのノウハウ面からの支援方法として、ペアレント・トレーニングの技法がある。このペアレント・トレーニングの課題のひとつが、3歳未満の乳幼児を持つ親を対象としたプログラムの開発である。3歳未満の子どもを持つ保護者へのペアレント・トレーニングによる介入プログラムの開発は、国策として母親の就労を推進しようとしているわが国においては、母親の就労率や労働時間が増えても、そのことが子育てへの悪影響を及ぼさないための予防策として重要である。また、少子化の時代が続く中で、やがて生き残り競争にさらされることが予想される保育所や幼稚園、認定子ども園において求められる本質的な機能の側面としての、子育てのノウハウ面からの養育者支援、不適切な子育てへの防止、より幼い時期からの子どもの問題行動やメンタルヘルス上の問題の予防実践は、保育施設の中核的な知的資源となるだろう。

従来のペアレント・トレーニングのプログラムの多くは、主に子どもの行動学習の理論に基づいて、子どもの望ましい行動の学習と不適切な行動の消去を中心としている。この流れでは、Bywater & Hutchings et al. (2011) が、3歳未満の乳幼児を担当する保育者へのIncredible Yearsプログラムの適用を検討している。また、変り種としては、Van Zeijl, Mesman, Van IJzendoorn et al. (2006) が、愛着形成の理論に母親の感受性への介入プログラムの効果を示している。

3歳未満の乳幼児の子育てを念頭においたペアレント・トレーニングのプログラムにおいて考慮しなければならないポイントは、主たる愛着対象者である母親との間の愛着関係、そして、愛着関係の形成に大きな影響を及ぼす母親の心のコンディションである。母親にとって、子どもが1～3歳のこの時期は、授乳の終了や次子の妊娠出産など性ホルモンの分泌の大きな変化が生じる時期であり、女性にとってメンタルヘルスの危機的時期である。また、この時期は、次子の妊娠・出産などの家庭内の環境の変化あるいは職場復帰や再就職といった家庭の外に向けての急激な環境の変化や課題が発生する時期である。このような母親のメンタルヘルスの危

¹宮崎大学大学院教育学研究科

²はなまるプロジェクト

³宮崎大学医学部小児科

機への対応スキルを、親としてのスキルの一環としてペアレント・トレーニングのプログラムの中に導入する必要がある。

母親のメンタルヘルスに対応したペアレント・トレーニングのプログラムを策定するに当たって、我々は認知行動療法モデルに基づいたメンタルヘルスプログラムを採用する。これには2つの理由がある。ひとつは、我々がこれまで開発・実践してきた、はなまる幼児版（立元・古川・鮫島ほか,2015：立元・古川・福島,2015）、はなまるお入学準備（幼保小連携）版（立元・斎田・福島ほか,2015：立元・椎葉, 2015）、はなまる小学生版（立元・古川・斎田ほか, 2012）の各ペアレント・トレーニングプログラムは、行動学習の理論に基づく行動療法に位置づけられる。そして、認知行動療法の理論は、行動療法の考え方ときわめて親和性が高いために、プログラムの連続性を保つことができるためである。もうひとつの理由は、認知行動療法によるうつ病等の心の問題に対するエビデンスが高く評価されていることである。

認知行動療法は、人の心の働きを、“認知”、“感情”、“行動”の3つの要素が影響しあう循環モデルを用いて治療あるいは予防のプログラムを組み立てる。ペアレント・トレーニングの参加者にとって、“感情”の要素は一般的には容易に変容できるように感じられるが、確実に慎重に変容を進める系統的脱感作の技法は、たとえプログラム指導を受けたとしても単独では難しい面がある。他方、“認知”や“行動”の要素は、介入プログラムでの取得内容を実生活の中で応用していくことが可能である。このうち、“行動”の要素は、ペアレント・トレーニングプログラムの中で教示される養育スキルやメンタルヘルス上のスキルに相当する。我々は、本研究に先立って、乳幼児版の養育スキル尺度を作成している（立元・武井・上富, 2017）。乳幼児版のペアレント・トレーニングのプログラム設計およびエビデンス評価のための次の課題は、乳幼児を育てている母親の子育てに関する認知の尺度の作成である。

乳幼児版のペアレント・トレーニングプログラムは、母親の子育てスキルと子育てに関する認知の改善に焦点を当てる。本研究は、このプログラムの効果を検証し、また、エビデンスの理論的な検証を行うための、乳幼児をもつ母親の“子育てに関する認知”を測定するための子育て認知尺度を作成し、さらに、信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

宮崎県内と大分県内の保育所に子どもを預ける、満1歳から2歳11か月の子どもをもつ母親390名を調査対象とした。このうち、質問紙の前質問項目の25%以上の欠損値があった母親と、対象年齢に含まれない子どもの母親のデータを除いた358名分のデータを分析対象とした。子どもの月齢は平均25.2か月（SD=7.7）であった。

また、再検査信頼性の検討のために、大分県内の保育所における60名の母親を対象に、2度目の調査を行った。2回目の質問紙を回収できなかった母親と25%以上の欠損値があった母親を除いて50名を分析対象とした。子どもの月齢は平均24.8か月（SD=7.1）であった。

調査協力機関

宮崎県宮崎市の2保育所、宮崎県都城市の2保育所、宮崎県延岡市の2保育所、宮崎県日南市の2保育所、宮崎県日向市の1保育所、宮崎県三股町の1保育所、宮崎県国富町の2保育所、宮崎県高鍋町の1保育所、宮崎県新富町の1保育所、大分県臼杵市の1保育所、以上計15箇所

の保育所の協力を得た。

調査材料

子育てに関する認知を測定する項目としては、子育てに対しての「ポジティブな認知」と「ネガティブな認知」をまず想定した。子育てを行っていくうえで生じてくる認知には、実際には様々なものが含まれることが予想されるが、これらの認知は多岐にわたるために、多くの種類の認知を細かく設定してしまうとかえって実用的ではなくなってしまう。そこで、ポジティブな子育て行動と相互に作用する「ポジティブな認知」、また、ネガティブな子育て行動と相互に影響を及ぼすことが想定される「ネガティブな認知」を想定した。さらに、まだ幼い子どもの心の状態に注意を向け理解しようとする感受性を高める認知活動としての「感受性」を加えて項目を作成した。母親と子どもの相互作用や子どもに対する感受性に関して記述された Maternal Sensitivity Scales (Ainsworth) やTK式幼児版親子関係検査(品川・品川, 1992)を参考にして、乳幼児をもつ母親の認知についての質問項目を作成し、仮の乳幼児版認知尺度として用いた。質問項目は全部で53項目あり、各項目について子どもや子育てに対する普通の母親の考え方を4件法(1=まったくそうではない, 2=あまりそうではない, 3=ときどきそうである, 4=いつもそうである)で母親に自己評定するように求めた。

手続き

質問紙は、各保育所の所長の許可を得て、各保育所の担当者を通じて満1歳から2歳11か月の子どもをもつ母親390名に配布した。対象年齢内に2人以上の子どもをもつ母親には、より年長、または、より年少の子どもを、保育所単位で指定して、1人の子どもについての認知を回答するように求めた。質問紙を配布する際には、プライバシー保護のために質問紙を封筒に入れて配布した。記入後、各保育所に母親から返却された封筒を郵送で回収し、そのデータを分析に用いた。

結 果

因子分析

母親が記入した質問紙で25%以上の欠損値のあった被験者のデータを除外した358名分の回答データを分析対象とした。乳幼児版認知尺度の因子構造を明らかにするため、重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転の因子分析を行った。スクリープロット図を参照して、3因子(27項目)を抽出した。

これら3つの因子に分類された27項目以外の26項目は、因子負荷量が小さい項目(因子負荷量.40未満)、共通性の低い項目、 α 係数による項目の精選によって除外された項目であった。最終的に抽出された因子とそれに含まれる質問項目及び α 係数の値をTable 1に示す。

『ポジティブな認知』の因子(12項目 $\alpha = .930$)

まず、最初の質問項目のグループは、「お子さんが何かを一生懸命やり遂げようとしている時には、見守ろうと思う。」、「お子さんがチャレンジしたがっていることに対し、出来るだけその機会を与えたいと思う。」、「あなたは、お子さんと遊んだり話したりするのがいつも楽しいと感じる。」、「あなたがさせたいことよりも、お子さんがやりたいことを優先しようと感じる。」、「あなたは、テレビ・パソコン・携帯電話に夢中になり過ぎて、お子さんの存在を忘れてしまうことがある。」、「あなたは、お子さんの感情が分かる手がかりをあまり知らない。」、「あなたが不

Table 1 因子分析の結果

質問項目		1	2	3
1. ポジティブな認知 ($\alpha = .930$)				
47	お子さんが何かを一生懸命やり遂げようとしている時には、見守ろうと思う。	.925	.103	-.015
32	お子さんがチャレンジしたがっていることに対し、出来るだけその機会を与えたいと思う。	.917	.108	.010
39	あなたは、お子さんと遊んだり話したりするのがいつも楽しいと感じる。	.866	.010	.027
51	あなたがさせたいことよりも、お子さんがやりたいことを優先しようと感じる。	.834	.137	.035
23	あなたは、テレビ・パソコン・携帯電話に夢中になり過ぎて、お子さんの存在を忘れてしまうことがある。	-.760	.069	.049
48	あなたは、お子さんの感情が分かる手がかりをあまり知らない。	-.726	.055	-.154
25	あなたが不安な気持ちでも、お子さんは不安にならないと思う。	-.709	-.310	.116
2	あなたのやりたいことよりも、お子さんがやりたいことを優先しようと感じる。	.676	-.036	.102
18	家の中にいれば、お子さんがどこにいても気にならない。	-.640	.060	.144
14	お子さんの世話をするのは、親の特権であると思う。	.608	.043	-.026
31	お子さんの要求を理解してはいるが、気付かないふりをしたくなることがある。	-.538	.232	.006
26	お子さんが手に負えないほど大泣きしていると、お子さんから離れたいと思う。	-.444	.300	-.069
2. ネガティブな認知 ($\alpha = .748$)				
20	お子さんがあなたの言うことを聞いてくれないときには、あなたに対する反発や抵抗をしていると感じる。	.057	.573	.074
19	あなたは、子育ての不安や不満を誰かに言いたくなることがある。	-.070	.572	.031
22	お子さんに対して、「だめ」という禁止の言葉を使うことが多い。	-.038	.538	.223
9	お子さんの世話をすることが、辛いと感じることがある。	.026	.527	-.112
29	あなたは、お子さんにまわりつかれるのを、うっとおしいと感じることがある。	-.040	.523	.053
7	お子さんがあなたの言うことを聞いてくれない時に、あなたは不安や怒りを感じる。	.093	.512	-.053
17	あなたがしたいことをできないのは、お子さんがわがままだからと感じる。	.013	.497	-.143
12	家事が思うように進まないのは、お子さんがあなたの思い通りにならないからである。	-.033	.454	-.014
3. 感受性に関するメタ認知 ($\alpha = .737$)				
8	あなたは、お子さんの感情が分かる手がかりをたくさん知っている。	-.068	-.096	.655
50	お子さんが、どんな行動をした時に怒るか、ということが分かる。	-.029	.017	.597
41	お子さんが泣き出すと、すぐにその理由が分かる。	-.114	-.026	.574
46	お子さんが抱っこ状態から降りたがっている時には、その意図がすぐに分かる。	.032	.108	.529
10	お子さんが、どんな行動をした時に喜ぶか、ということが分かる。	.058	-.033	.499
1	お子さんが抱っこしてほしそうな素振りを見せた時には、その意図がすぐに分かる。	.102	-.001	.475
21	どこかに出かけて、お子さんが疲れたというサインが分かる。	-.014	.088	.448

安な気持ちでも、お子さんは不安にならないと思う。」「あなたのやりたいことよりも、お子さんがやりたいことを優先しようと感じる。」「家の中にいれば、お子さんがどこにいても気にならない。」「お子さんの世話をするのは、親の特権であると思う。」「お子さんの要求を理解してはいるが、気付かないふりをしたくなることがある。」「お子さんが手に負えないほど大泣きしていると、お子さんから離れたいと思う。」の計12項目から構成され、 $\alpha = .930$ という高い内的整合性が確認された。これらの質問項目は、母親の子どもや子育てに対する肯定的な考えや捉え方を示しているため、『ポジティブな認知』の因子と命名した。

『ネガティブな認知』の因子（8項目、 $\alpha = .748$ ）

次の質問項目のグループは、「お子さんがあなたの言うことを聞いてくれないときには、あなたに対する反発や抵抗をしていると感じる。」「あなたは、子育ての不安や不満を誰かに言いたくなることがある。」「お子さんに対して、「だめ」という禁止の言葉を使うことが多い。」「お子さんの世話をすることが、辛いと感じることがある。」「あなたは、お子さんにまわりつかれるのを、うっとおしいと感じることがある。」「お子さんがあなたに言うことを聞いてくれない時に、あなたは不安や怒りを感じる。」「あなたがしたいことをできないのは、お子さんがわがままだからと感じる。」「家事が思うように進まないのは、お子さんがあなたの思い通りにならないからである。」の計8項目から構成され、 $\alpha = .748$ と内的整合性が確認された。これらの質問項目は、母親の子どもや子育てに対する否定的な考えや捉え方を示しているため、『ネガティブな認知』の因子と命名した。

『感受性に関するメタ認知』の因子（7項目 $\alpha = .737$ ）

最後の質問項目のグループは、「あなたは、お子さんの感情が分かる手がかりをたくさん知っている。」「お子さんが、どんな行動をした時に怒るか、ということが分かる。」「お子さんが泣き出すと、すぐにその理由が分かる。」「お子さんが抱っここの状態から降りたがっている時には、その意図がすぐに分かる。」「お子さんがどんな行動をした時に喜ぶか、ということが分かる。」「お子さんが抱っこしてほしそうな素振りを見せた時には、その意図がすぐに分かる。」「どこかに出かけて、お子さんが疲れたというサインが分かる。」の計7項目で構成され、 $\alpha = .737$ と内的整合性が確認された。これらの質問項目は、子どもの発するシグナルへの感受性に関する自分の認知を、母親がどう認知しているかということを示しているため、『感受性に関するメタ認知』の因子と命名した。

Table 2 乳幼児版認知尺度の相関 (n=358)

	ネガティブな認知	感受性に関するメタ認知
ポジティブな認知	-.168**	.195**
ネガティブな認知		-.142**

因子間の相関

上記の因子分析で抽出した3つの因子同士の関係についてPearsonの相関係数を算出した(n=358)。この結果、いずれの因子間においても相関が認められず、これらの因子は独立した認知であると考えられる。

再検査信頼性

因子分析を行った乳幼児版認知尺度を用いて、1ヶ月後に同一の被験者（ $n=50$ ）に再度回答させた。因子ごとの合計点数について、1回目と2回目のPearsonの相関係数を算出した。その相関関係をTable 3に示す。

それぞれの因子ごとの相関を見ると、『ポジティブな認知』は $r=.533$ 、『感受性に関するメタ認知』は $r=.522$ であり、比較的強い正の相関が見られ、『ネガティブな認知』は $r=.331$ で正の相関が見られた。よって、本尺度の得点は、比較的安定した指標であることを示唆していると考えられ、介入による乳幼児をもつ母親の子育てに関する認知を測定する尺度として信頼性のあるものであるといえる。

Table 3 再検査信頼性：1回目と2回目（1ヶ月後）の間の相関（ $n=50$ ）

	ネガティブな認知	ネガティブな認知	感受性に関するメタ認知
ポジティブな認知	.533**		
ネガティブな認知		.331*	
感受性に関するメタ認知			.522**

* $p < .05$ ** $p < .01$

並存的妥当性（乳幼児版養育スキルとの関係性）

本研究で作成した乳幼児版子育て認知尺度（27項目）と、乳幼児版養育スキル尺度（39項目：立元ら，2017）を、宮崎県内の保育所における満1歳から3歳未満の子どもをもつ母親138人を対象に同時に調査し、その関係性を検討した。

乳幼児版子育て認知尺度の『ポジティブな認知』、『ネガティブな認知』、『感受性に関するメタ認知』の3因子と、乳幼児版養育スキル尺度の『ポジティブなかかわりスキル』、『ネガティブなかかわりスキル』、『子ども主導』の3因子の関係についてPearsonの相関係数を算出した。その相関関係をTable 4に示す。

それぞれの因子同士の関係について検討すると、まず、母親の子育てに対する『ポジティブな認知』は母親の養育スキルのいずれの下位因子とも有意な相関を示さなかった。すなわち、母親が子育てをポジティブに捉えているようが、あるいは、そうでなかろうが、それは母親自身の『ポジティブなかかわりスキル』、『ネガティブなかかわりスキル』、『子ども主導』の使用に必ずしも一定の関係があるとはいえないということである。母親の子育てに対する『ネガティブな認知』は、『ポジティブなかかわりスキル』との間に負の相関が有意（ $r=-.252$, $p<.01$ ）で

Table 4 認知と養育スキルの相関（ $n=138$ ）

認知	ネガティブなかかわり	ネガティブなかかわり	子ども主導
スキル			
ポジティブな認知	.174*	.049	.042
ネガティブな認知	-.252**	.682**	.233**
感受性に関するメタ認知	.538**	-.265**	-.084

* $p < .05$ ** $p < .01$

あり、逆に、『ネガティブなかかわりスキル』との間に強い相関 ($r=.682, p<.01$)、さらに、『子ども主導』との間に弱い相関 ($r=.233, p<.01$) が認められた。すなわち、母親の『ネガティブな認知』の得点が高く、母親が子育てをネガティブなものとして捉える度合いが強いと、母親の『ポジティブなかかわりスキル』の使用は抑制され、逆に『ネガティブなかかわりスキル』の使用が大きく高まってしまいう傾向があることが示された。さらに、母親の『ネガティブな認知』の得点が高く、母親が子育てをネガティブなものとして捉える度合いが強いと、母親による子どもの行動の制御を弱め子ども主導の関係性を高めてしまう傾向があることを示している。この関係性は、パターンソン (1987) が例示している、親による子どもの行動の強制がやがて主導権を握ってしまった子どもによる親の行動の強制につながっていく“強制”のパターンを思わせる。認知行動論的というならば、母親の子育てに対するネガティブな“認知”が、ネガティブな“感情”を引き起こし、さらに子育て“行動”を抑制する。子育て“行動”が抑制されると、子育てに伴うさまざまな情報や感情を体験的に得ることがかなわず、『ネガティブな“認知”』が修正されるどころかますますネガティブな方向にシフトしていくという悪循環が続いていき、子育ての破綻に向かっていくという理論的解釈に合致することも考えることができる。一方、母親の『感受性に対するメタ認知』は、『ポジティブなかかわりスキル』との間に強い相関 ($r=.538, p<.01$) を示し、逆に、『ネガティブなかかわりスキル』との間に負の相関 ($r=-.265, p<.01$) を示した。母親が子どもの心の状態に適切に注意を向け、行動の観察や日常の相互作用の記憶から子どもの内的状態を適切に把握することができるならば、子どもに対して『ポジティブなかかわりスキル』を適切に用いて望ましい親子関係を維持していくことができる。さらには、母親が上手に子どもの内的状態を把握できると、『ネガティブなかかわりスキル』を用いる必要が少なくなってくるという、論理的に妥当な関係性が示された。

考 察

本論の目的は、乳幼児をもつ母親の子どもや子育てに対する認知を測定する乳幼児版認知尺度を作成することであった。乳幼児版親トレーニングプログラムの開発にあたり、乳幼児をもつ母親の認知を測定する乳幼児版認知尺度を作成することによって、乳幼児をもつ母親が自分の子どもや子育てに対して、どのように考え、捉えているのかということを明らかにすることができる。さらに、乳幼児版親トレーニングプログラムにおいて、この乳幼児版認知尺度を用いることで、母親のネガティブな認知を改善し、ポジティブな認知を増やす効果があるのか否かを検討することができる。そこで、母親と子どもの相互作用や子どもに対する感受性に関して記述された Maternal Sensitivity Scales (Ainsworth M.D.S.) および TK 式幼児版親子関係検査 (品川ら, 1992) を参考にして、53 項目の仮の乳幼児版認知尺度を作成した。

仮の乳幼児版認知尺度を用いて、保育所において満 1 歳から 2 歳 11 か月までの子どもをもつ母親のデータを集め、因子分析を行った。その結果、乳幼児をもつ母親の認知については、『ポジティブな認知』、『ネガティブな認知』、『感受性に関するメタ認知』の 3 因子を抽出した。

『ポジティブな認知』の因子は、子どもや子育てに対して肯定的に認知することなどについての質問項目で構成された。これらの項目は、それぞれ、子育てをするうえで望ましい認知であるため、この因子の得点は高いほうが好ましいと考えられる。

『ネガティブな認知』の因子は、「子どもや子育てに対して、否定的に認知すること、子育て

を辛いと感じることなどについての質問項目で構成された。これらの項目の得点が高いと、ネガティブな認知をする傾向が強くなり、抑うつ状態になりかねないため、この因子の得点は低い方が好ましいと考えられる。

『感受性に関するメタ認知』の因子は、子どもの感情状態の感知とその認知状況についての質問項目で構成された。これらの項目の得点が高いと、子育てをするうえで、子どもの発するシグナルや意図が分かる、あるいは感知していることを認知しているという状況である。そのため、この因子の得点は高い方が好ましいと考えられる。

さらに、それぞれの因子間の関係について検討した。その結果、どの因子間においても、ほとんど相関が見られなかった。このことから、これらの因子はほぼ独立した関係にあると考えられる。

因子分析を行った乳幼児版養育スキル尺度の再検査信頼性を検討するために、1回目と2回目の評価結果の間のPearsonの相関係数を算出した。因子ごとの相関を見ると、『ポジティブな認知』($r=.533, p<.01$)、『感受性に関するメタ認知』($r=.522, p<.01$)の各因子間で強い正の相関が見られた。また、『ネガティブな認知』($r=.331, p<.05$)も正の相関が有意であった。よって、本尺度は、1か月の期間をおいて測定しても特段の出来事や介入がない限り、安定した測定結果を示す信頼性のあるものであると判断できる。

本研究で作成した乳幼児版認知尺度の並存的妥当性を検討するために、同時に測定した乳幼児版養育スキル尺度(39項目、立元・武井・上富、2017)の『ポジティブなかかわりスキル』、『ネガティブなかかわりのスキル』、『子ども主導』の得点との関係性を検討した。その結果、概して論理的に妥当な方向性の相関関係が認められ、乳幼児期版の認知尺度の妥当性が示されたものであると解釈できる。

なお、乳幼児版認知尺度の母親の子育てに対する『ポジティブな認知』が、3種類の養育スキルとの相関関係を示さなかったことは一見意外ではあるが、「子育てを愉しく思っている、それが必ずしも適切な子育て行動が行われていることを示すわけではない」、また、「子育てを愉しく思っている、それが必ずしも不適切な子育て行動がなされていないことを示すわけではない」と解釈しなおすと、至極当然の結果であるように考えられる。子育てに関する“認知”がポジティブなものであっても、そのことが望ましい子育てのスキルや不適切な子育てスキルの使用に直結するわけではないというやや複雑な示唆は、今後の乳幼児版ペアレント・トレーニングの設計と施行にとって有用な観点を提供した。

母親の子育てに対する『ネガティブな認知』と『ポジティブなかかわりスキル』との間の負の相関、『ネガティブな認知』と『ネガティブなかかわりスキル』や『子ども主導』との間の正の相関は、子育てをネガティブに認知していれば、不適切な子育て行動が増え、また、幼い子どもに主導権を握られ振り回されてしまう状態になりがちであるという、妥当な関係性が示された。この相関関係は、ペアレント・トレーニングプログラムによる介入によって、母親の子育てに対する『ネガティブな認知』を改善することができれば、母親の『ポジティブなかかわりスキル』、『ネガティブなかかわりスキル』、『子ども主導』といった子育て行動を改善し、子育てに関する“認知”、“感情”、“行動”の3要素の循環の改善を期待できる可能性を示しているものと考えられる。

さらに、母親の『感受性に関するメタ認知』と『ポジティブなかかわりスキル』との間の正の相関、および、母親の『感受性に関するメタ認知』と『ネガティブなかかわりスキル』との

間に有意な負の相関が見られた。この『感受性に対するメタ認知』と『ポジティブなかわりスキル』および『ネガティブなかわりスキル』との関係性は、ペアレント・トレーニングプログラムによる介入によって、母親が子どもの心の内的状態に注意を向け、日々の行動の観察や日常の相互作用から子どもの内的状態を適切に把握することができるようになることを通して、母親の『ポジティブなかわりスキル』や『ネガティブなかわりスキル』を改善していきける可能性が示された。つまり、子育てに対する『ネガティブな認知』を改善してだけでなく、子どもの心の内的状態に母親の関心や注意を向け、また、子どもの認知や思考の発達等の知識を補うことによって、子どもの心の内情をある程度推測できるのだという“認知”変容によって子育ての行動を改善し、子育ての“認知”、“感情”、“行動”の良い循環へと変容させていくことができる可能性が示されたと解釈することができる。

引用文献

Ainsworth M. D. S. Maternal Sensitivity Scales

http://psychology.sunysb.edu/attachment/measures/content/ainsworth_scales.html

Bywater T. J., Hutchings J.M., Gridley N., & Jones K. (2011) Incredible Years Parent Training Support for Nursery Staff Working within a Disadvantaged Flying Start Area in Wales : A Feasibility Study. *Child Care in Practice*, 17, 285-302.

パターソンG.R. (1987) 家族変容の技法を学ぶ 川島書店

品川不二郎・品川孝子 (1992) TK式幼児用親子関係検査 田研出版

立元真・古川望子・賓田聖美・椎葉恵美子・福島裕子 (2012) 小学生版予防的ペアレント・トレーニングの試み (2) 行動療法学会第38回大会発表論集 124-125.

立元真, 古川望子, 鮫島浩, 布井博幸, 池ノ上克. (2015) 周産母子センター・小児科より紹介された子どもの個別ペアレント・トレーニング -予備的な無作為化比較試験- 行動療法研究 41, 127-135.

立元真・斎田聖美・福島裕子・瀬戸山由香里 (2015) 幼保小連携のためのペアレント・トレーニングの実践一 日本教育大学協会研究年報 33, 317-327.

立元真・椎葉恵美子 (2015) 幼保小連携版ペアレント・トレーニングの個別施行の試み 九州心理学会第76回大会発表論文集

立元真, 武井優子, 上富望子 (2017) 乳幼児版養育スキル尺度の作成, 宮崎大学教職実践総合センター紀要25, 23-31.

Van Zeijl J., Mesman J., Van IJzendoorn M.H., Bakermans-Kranenburg M. J., Juffer F., Stolk M. N., Koot H. M., & Alink L.R. (2006) Attachment-Based Intervention for Enhancing Sensitive Discipline in Mothers of 1-to 3-Year-Old Children at Risk for Externalizing Behavior Problems : A Randomized Controlled Trial : *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74, 994-1005.

付記

本研究の遂行に当たっては、科学研究費補助金基盤研究 (B) 24330201の補助を得た。

本研究を含む一連の研究計画は、宮崎大学教育文化学部研究倫理審査委員会の研究倫理審査を経て遂行された (宮崎大学教育文化学部研究倫理審査委員会 平成24年2号)。

また、本研究の遂行に当たっては、研究室の学部学生であった、斎藤葵、蓮子美喜、阿萬恵理花、新智帆、海老沙也香、森山紗也子、神原志保、青山奈緒美、村上昌平の各氏の助力を得た。